

P1-033

予防接種時の幼児の苦痛や苦痛緩和に関する親の認識と行動の実態

藤沼 小智子¹⁾、小島 ひで子²⁾東京医科大学 医学部 看護学科¹⁾、
北里大学 看護学部²⁾

【はじめに】 予防接種は医原性疼痛の一般的な原因である。痛みは人間の成長の糧という文化的特徴が考えられる。予防接種時の苦痛への親の認知や苦痛緩和へのニーズを把握したい。

【研究目的】 予防接種時の苦痛や苦痛緩和に関する親の認識と行動の実態を明らかにする

【研究方法】 対象：東京都 23 区に在住の健康な 3 歳～就学前までの子どもを持つ親

データ収集：インターネット調査会社のモニターの中で対象の条件を満たす者を対象として質問紙調査を 2019 年 10 月に実施した。

調査内容：最初の予防接種の接種時期である 2～6 か月、1～2 歳、そして 3～6 歳の予防接種の苦痛緩和に対する親の実施状況と知識、子どもの予防接種への認識、子どもの予防接種苦痛緩和に対する認識について調査し SPSS を用いて記述統計を行った。

倫理的配慮：回答の前に研究説明書を示し同意を得た。説明書にはアンケートへの回答と提出をもって同意とみなすこと、個人情報取り扱い、データ保管及び廃棄、利益相反開示、対象者への結果の公表方法を明記した。研究倫理審査委員会の承認を得た（2019-10-2、T2019-0071）。

【結果】 515 名より回答があった。回答者の性別は女性 73.2%、平均 37.6 ± 5.7 歳であった。子どもの年齢は 3、4 歳がともに 31.8%と多く、52.4%が第 1 子であった。

1. 予防接種への認識〈安全である〉は 78.3%、〈受けないと重い病気になる〉は 87.6%が肯定的に考えていた。2. 苦痛・苦痛緩和への認識〈痛がったり怖がったりする〉〈痛がることを和らげるのは大切〉〈医療者からのアドバイスには必ず従うようにしている〉は 70%以上肯定的であった。一方で〈痛がっていない〉〈怖がっていない〉は 50%以上否定的であった。3. 苦痛緩和実践半数実施していたのは、〈最中に肌と肌を密着させて抱く〉〈最中に縦向きで抱っこをする〉〈最中に親の膝の上に座らせる〉〈最中に親が穏やかに落ち着いて声をかける〉〈最中に近くにいるようにする〉。適切と考える・実践したい方法と同様であった。適切と考える・実践したい方法が実施と比べ回答が多かったのは、〈最中に親の膝の上に座らせる〉〈最中に気をそらす〉〈鎮痛剤を使用〉〈医療者が行う〉であった。

【考察・結論】 予防接種時の苦痛や苦痛緩和への認識は 7 割を超えたが苦痛緩和の実践は半数程度であり、中でも医療者による苦痛緩和実践は十分ではないことが推察された。本研究は科研費（19K11077）の助成を受けた。

P1-034

予防接種を受ける子どもの親の意思決定要因とその過程で生じる不安・迷いに関する文献研究

川添 優、吉川 未桜、吉田 麻美、田中 美樹

福岡県立大学看護学部

【目的】 小児期の子どもをもつ親が子どもに予防接種を受けさせるかどうかの意思決定に関わる要因と、意思決定の過程で生じる不安・迷い、意思決定の際に情報収集する人・ツールについて明らかにし、親に対する関わり方を検討することを目的とした。

【方法】 医学中央雑誌 web 版を用い、「予防接種」「意思決定」のキーワードと「予防接種」「親」「不安」のキーワードで原著論文に絞って検索した。意思決定要因に関わる記載があること、子宮頸がん予防ワクチンに関するものを除外するという条件により 15 文献を抽出し、それらについて文献検討を行った。

【結果】 意思決定をする際に生じる不安・迷いは、[新しい制度への戸惑い] [知識不足] [漠然とした副反応への不安] [インフォームドコンセントによる怖さの増大] [ワクチン効果に対する疑念] [保護者の負担] であった。また、情報収集する人・ツールは [母親本人] [身近な人] [医療] [行政] [マスメディア] [情報収集していない] であった。さらに、予防接種を受けさせた人の中でも医療者との良好な関係や義務感、責任感、知識に基づく判断等により積極的に受けさせた人と、後悔をしないため、仕事に対する影響を最小限にするため、費用負担、受けさせないことによる周囲からの非難等により消極的な理由で受けさせた人がいた。予防接種を受けなかった人には、費用負担、生活環境、子ども自身の要因、情報不足等により受けられなかった消極的な理由がある一方で、副反応に対する不安やワクチン効果に対する疑念、予防接種制度に対する考え方、不十分な知識、親の価値感・信念等による積極的な理由により受けさせなかったものがあつた。

【考察】 予防接種を積極的に受けさせている人に対しては、予防接種に関して個人の理解度に合わせて話をし、病院に連れていきやすいような環境づくりや情報交換の機会の確保、労いにより自己効力感を高める関わりを行う必要がある。消極的な理由で受けさせている人に対しては、不安を表出できる環境を作り、納得できる説明をする必要がある。消極的な理由で接種しない人に対しては、正しい情報が容易に閲覧できるツールの紹介、妊娠期等の受診時の情報提供を行う必要がある。積極的に接種させない人に対しては、科学的根拠を示した正確な知識の提供と、保護者がリスクを考慮しながらも予防接種の重要性を認識し、接種に至る意思決定過程を支援する必要がある。